

恋カフェ

S a n a e & T o r u

三季貴夜

Takaya Miki



エタニティ文庫

目次

はじめてのコーヒー

5

二人でカフェ

163

君に珈琲を コヒキ
side 青山透

275

書き下ろし番外編
恋カフェと呼ばれて

293

はつめんのローラー

プロローグ

『今日の山羊座のラッキーカラーは緑。ラッキーアイテムはボールペン。何か失敗しても笑顔を忘れないで。いいことがあるかもしれない。気分転換に音楽を聴くと吉』

「早苗さなほっ、早く降りていらっしやい。また遅刻ぎりぎりになるわよ」

「はい。今行きます」

自分の部屋でテレビの占いコーナーをチェックしていた村野早苗は、階下から母親に呼ばれて焦った。

慌てて緑のインクのボールペンを探し出し、バタバタと下へ降りる。

「なあに？ ひよっとして、また占いを見たの？」

食卓についたとたん母に声をかけられ、少しづつが悪い。とつくに朝食を終えてお茶を飲んでいた父からも呆れたような視線を受けてしまい、なおさら居たたまれない気分になった。

「いいじゃない。好きなんだもん」

「でも、学生じゃあるまいし……いつまでもそんな子供っぽいものに夢中になって。あなたも社会人なのよ？」

「わかってるわよ。でも……」

痛いところをつかれ、早苗は口ごもる。

新卒で今の会社に入社してそろそろ半年になるが、なかなか学生気分が抜けない。朝食を母に作ってもらったり、部屋の掃除をしてもらったりと、つつい親に甘えてしまふし、どんなに忙しい時でも占いのチェックはやめられない。

「占いくらい、いいじゃないか。誰に迷惑をかけるでもなし……」

「そうだよ。お父さん」

父親がフォローしてくれ、早苗は勢い込む。

「だいたい私がちよっと無理かもっていう大学に受かったのだから、占いのとおりに行動したおかげだし」

「はいはい。だから占いはとっても大切だし、あなたの生活に欠かせないのよね」

母は苦笑している。

「そうやって笑っているけれど、受験の時だけじゃないのよ？ バイトや入社の面接の時も占いのアドバイス通りにしたら受かったし……」

占いは何かに迷っている時や、新しいことをはじめたいけれど勇気がもてない時に早苗の背中を押してくれる。

この感覚を他の人にうまく説明できないのがもどかしい。とにかく早苗は昔から何かと占いに助けられていて、今では朝の占いをチェックして出かけるのが日課だ。

「そんなに占いが好きなら、初詣はつもうでで引いたおみくじにあやかって見合いでもしてみる?」
ポンと両手を打って母親が微笑む。

唐突な台詞せりふに、早苗は一瞬ぼかんと口を開けてしまった。

「な、何?」

「ほら、今年の初詣で引いた早苗のおみくじに、良縁ありって書いてあったじゃない?」
「も、もう何考えてるの? 私やつと社会人になったばかりだよ?」

冗談だとは思うけれど、本当にお見合いなんてさせられたらたまらない。早苗はふるふるとう首を振った。

「別にいいじゃない。昔と違って、結婚しても専業主婦になる人のほうが今は少ないし、結婚して仕事も続けられよ」

占いばかり気にするなという忠告をこめて、母はお見合い話など持ち出したのだろう。早苗だって、占いに頼りきりではいけないと自覚している。

でも、わかっているけれど止められない。早苗にとって占いは、もう生活の一部になっているのだ。ただの習慣かもしれないけれど、「占いをチェックしておいてよかった」と思うことがけっこうある。
だから、占いをチェックしないで出かけるのは、すっぴんで出かけるのと同じくらい有りえない。

「栗野くりのさんに頼んでみるか?」

父まで、近所で有名な仲人好きの人の名前を挙げだしたから、たまらない。

「やめてよー」

「なんだ? 好きな人でもいるのか?」

父の問いかけに、早苗はぎくりとする。

「い、いないわよ」

否定したけれど、本当はいる。

ただ、相手の名前すら知らない、完全なる片思いなのだ。

彼の姿が鮮やかに脳裏に浮かぶ。今日も会えるだろうか?

そんなことを考えていたから、つい顔がにやけてしまったのだろう、父に妙な顔で見つめられた。

「と、とにかく、まだお見合いとか結婚は早いから……、いってきます」

早苗はこれ以上お見合いをすすめられないうちにと、慌てて食卓を離れた。そしてそのまま家を飛び出した。

会社の最寄り駅に降り立った早苗は、駅前のロータリーで立ち止まる。今日もいつもの彼に会えるだろうか。

お見合いだなんだと家で言われた時、思い浮かべた片思いの彼。

早苗は毎朝通勤路の途中にある公園ですれ違う男に、ずっと恋している。名前も年齢も、何をしている人なのかも知らない。

それでも……
好きだ。

初めて彼を見たのは、入社して間もない頃。

占いで、いつもと違う道を通るとラッキーなことが起きると言っていたから、通勤路を変えて公園を横切るルートを通ってみた。

円周すると一キロくらいの公園には、早苗と同じように通勤途中のOLやサラリーマンらしき人達がちらほらいた。

他にも、ジョギングやウォーキングをしている人達がいて、そのほとんどは近所のお年寄りか主婦といった感じだ。

早苗は普段通らない公園の様子を見るときもなしに見ていた。そこでジョギングしていた一人の若い男が彼だった。

早苗のほうに向かつて走ってきた彼は、黒い上下のウェア姿で、うっすらと額に汗をかいている。背が高く、ウェア越しでもスタイルがいいのがわかった。

早苗は彼から目が離せなくなる。
精悍せいけんで渋くて、人目をひくものがあつたからだ。

早苗の友人や会社の同僚にはいないタイプで、包容力がありそうだ。年は三十歳くらいだろうか。

すれ違った時、微かすかに汗の匂いがしたけれどちっとも不快じゃなかった。早苗はしばらく男の逞たくましい背中を見つめていた。

次の日も公園を抜ける道を通ったら、また彼とすれ違った。そんな日々を半年近く続けるうちに、早苗は彼を意識するようになった。

今では彼の姿を見ですれ違うたびに、早苗の心は浮き立つ。黒く強い光をたたえている瞳の奥に、優しさと温かな物が感じられる。

今度思い切つて、声をかけてみようかな。

ほとんどすれ違うだけとはいえず、毎日顔を合わせているのだから……

「おはようございます」の挨拶あいさつくらいなら不自然じゃないうらうし。

現に彼は他の通勤途中のサラリーマンやOL、ジョギングやウォーキングをしている主婦や老人と挨拶をかわしている。

早苗はそれが羨ましくて仕方ない。

本格的に彼が好きだと自覚したのはいつだろうか？

いつからどんな風に好きになったのかはわからないけれど、今は彼の声を聞いたり周囲の人と雑談している時の笑顔を見たりすると胸が高鳴る。

とにかく彼が好き。

だから、最初は占いに従って選んだ公園の道を、今では占いとは関係なしに毎日通っている。

彼と会話をしてみたい。話し掛けてもらえたら嬉しいのに。

いつもそんなことばかり考えていた。

一

『今日の山羊座のラッキーカラーはオレンジ。ラッキーアイテムはマグカップ。仕事でミスをするかもしれませんが、それも最後に生かせば大丈夫。くよくよしないで。また、

想いを寄せる人と仲良くなれるかもしれません』

「申し訳ございません。デザイン部二課の羽田はただ今外出中で、十六時に帰ってきます」

ここは大手デパートを経営する会社の本社受付。この会社の受付嬢として働いている

早苗は、訪ねてきた相手にそう言い、頭を下げた。

次の瞬間、隣に座る先輩受付嬢に軽く咳払いをされる。

あ、やば……、私またまずいこと言っちゃったかも……

早苗の背中にさっと冷や汗が流れる。

「あー。そうですか。ではまた出直します」

「はい。そうしてください。お待ちしていますね」

やばい、と思いつつも早苗はにこりと微笑む。すると、羽田を訪ねてきた男もつられたように笑い、くるりと背を向けた。

早苗は先輩とともに頭を下げ、その男を見送った。

「はあ……」

男の姿が完全に見えなくなったところで、先輩が溜め息を吐き出す。

「村野さん、随分フレンドリーな対応ね」

「は、はい」

先輩である相川の反応を見て、早苗は内心ひやりとする。

今の相川の言い方から察するに、やっぱり自分が失敗したのは間違いないさそうだ。

「えっと……、すみません」

早苗は素直に頭を下げた。

「うん。もつときちんとした言葉遣いをするべきだったわよね？」

「はい。あの、『十六時に帰ってくる』じゃなくて、『帰社予定』と言うべきでした」

早苗の背中にはまだ冷や汗が流れている。

「そうね。それに今の人、滝野川繊維たきのがせいのの人で、布地販売の営業に来ているのよ。でも、今うちの会社では必要ないからって、すでに何度かお断りしているの」

言われて、確かに今の男はよく見る顔だと思いつく。

「だから私達受付も、お引き取り頂くように伝えているの。なのに十六時に戻ってくるとか言っちゃって駄目じゃない」

「え、はい……」

そんな経緯があったとは知らず、早苗の返事は申し訳なさから小さな声になってしまふ。

今日のラッキーカラーにあわせてオレンジのマニキュアにしたんだけど、よくないことが起きた……

少し沈みかけたけれど、気持ちを切り換える。

ああ、メゲちゃ駄目。

今日のはじまったばかりだし、頑張らなくちゃ……

早苗は心の中で活を入れて、背筋を伸ばした。

そして相川に尋ねる。

「あの……」

「何？」

「営業の方は……。今の方は今後もお通ししたらいけないんでしょうか？」

そう聞くと、相川はあきれた表情になった。

「そうよ。羽田さんの態度や雰囲気で、そうしたほうがいいだろうと思ったから、さりげなく聞いたのよ。本社の受付ともなればそういうのも察知して、色々配慮すべきなのよ」
今、この受付ロビーには、自動ドアの脇に立つ警備員以外誰もいない。そのため、もちろんひそひそ声でだが、こういう話をしていられる。

「はい。すみません」

理由を知って納得した早苗は、相川に謝る。

「押し付けがましいって思っているかもしれないけど、あなたのために思って言っているのよ……」

早苗がしよげているのを察してか、相川はそう付け加える。

「それとも、そんなに言い方とかきついかな私……」

今度は相川がうなだれはじめて、早苗は焦る。

「あ、えっと、大丈夫です。もう慣れました」

言ってしまったから、早苗はあつと声を出す。

「あー、その、違うんです……」

どうして私はこういう言い方しかできないんだらう？

口下手で、気持ち先走っていつも失言してしまう。

相川は諦めたような笑みを浮かべている。

「私もあなたのそういう言い方に慣れた」と言いたげな顔だった。

「すみません私、あの……」

自分が何かやらかしてしまつた時に、忠告してもらえるのはありがたい。本当に頼りになる先輩だと思つている。

それをなんとか伝えたくて口を開くが、エレベーターを降りてきた来客に阻まれた。

就職の面接に来ていた女子大生や、会議に参加していた支店の社員達だ。

彼らは入館証を戻しに受付にやつてくる。少し遅れて、他のお客様もエレベーターを降りてやつてきた。

そのせいで早苗は相川にきちんと謝る機会を無くしてしまつた。

早苗は女子大生の相手を、相川は社員達の相手をはじめめる。

来客は受付が混んでいるのを見て、少し離れた場所で待っていてくれる。早くその方の相手をしなければと思うが、焦るあまり、すぐ次の行動に移れなかった。

「君、車のキーを」

少し急いでいる様子の相手にその声をかけられる。

その声で我にかえつた早苗は、慌ててお客様から預かつた鍵の置き場所を探る。するとそこには、二つの鍵がかかつていた。

「あ、恐れ入ります、お客様の鍵は……」

二つの鍵を持ち上げ、どちらでしょうか？ と続けようとした時、横から相川の手が

さつと伸びてきて、お客様に鍵を渡す。

「お、ありがとう」

そう言つて、鍵を受け取ると去つていった。

相川の見事な受付さばきを間近で見た早苗は、感激しながら仕事を続けた。

「村野さん、ちよつといいかな？」

一段落ついて、ブースの前から誰もいなくなつたとたん、やや尖つた口調で相川から

声をかけられた。

「あ、はい」

「受付に配属されて数ヶ月経つんだし、そろそろ大勢のお客様が一度に来てもらうたえないようにならなきゃね」

やはりそれかと、早苗はしゅんとなる。

「すみません本当に」

自分の不手際で、お客様を待たせてしまった。

「それに、さっきのお客様の車の鍵の件だって、しょっちゅう車で来ているのはあの方だけなんだから、どういう鍵なんだか、もう覚えてもいいはずだけど？ だいたいあのキーホルダーはかなり特徴があるじゃない。いい加減、知らないとか、覚えていないじゃすまされないのよ。これからは気をつけて」

それきり相川は前を向いて、いかにも受付嬢というすました顔になった。もう何か話しかけられる雰囲気ではない。

ああ。もう……。なんか気まずい。

私、受付の仕事に向いてないのかもしれない……

このところ早苗は頻繁ひんぱんにそう感じている。

入社したての頃は色々覚えなければいけなかったし、社会人としての生活のペースを

掴つかむのに精一杯で、そこまで考える余裕がなかった。だが最近は少し慣れはじめたせいか、そんなことばかり考えてしまう。

そもそも早苗がこの会社に入社したのは、学生時代にこの会社が経営するデパートの地下でバイトをしていた時、接客がとても楽しかったからだ。大学を卒業してからも、ここに就職してデパートの売り場で働きたいと思っていたのに、何故か本社の受付に配属された。

人生が思い通りにいくことばかりではないことはわかっているが、出鼻をくじかれた気分になった。

それでも、自分なりに精一杯頑張っている。

その頑張りが空回りしている気もするけれど……

ほんやりと考えながら、ついこの間、学生時代の友達と女子会をしたことを思い出す。その時、仕事に関する自分の思いを語ったのだが「そんなのみんな同じよ。多分誰でもそう感じるし、結局慣れの問題なんじゃないの」と友人には言われた。

そしてそのまますぐに、恋の話になってしまった。

恋の話に興味がないわけではない。早苗だって、恋をしたい。彼が欲しい。実際、公園で毎朝見かける彼に恋している。

でも、当面の悩みは、仕事だ。自分自身の資質の問題もあるし、先輩である相川との

関係がうまくいっていないのも感じている。

どちらの問題も、自分で動き出さなきゃどうにもならないことは理解しているが、具体的は何をしたらいいのかわからない。その結果、余計に毎日の古いコーナーが気になるのだ。

そんなことを考えていたら、相川にわき腹をつつかれた。ハツとしてあたりを見ると誰かが自動ドアから入ってくる場所だった。

ジーンズに白いカッターシャツ、それに黒いカフェエプロン姿の男性だ。どこからどう見ても営業に来たサラリーマンではないとわかる。

目をこらしてその男性の顔を見ていた早苗は、自分の心臓が飛び跳ねるのを感じた。

えっ……

跳ねた心臓が踊り出す。

彼だ。

早苗の懂れの、毎日すれ違う彼……

そう思ったとたん、高鳴った胸が、さらに激しく鼓動を打つ。

やだ……。どうしよう……

なんで？ どうしてここに？

早苗は占いに従ってオレンジに塗った指のマニキュアを見た。

彼はガードマンに何か尋ねてから、真っ直ぐに受付に向かってきた。これまでトレーニングウェア姿しか見たことがなかったから、今の彼のかっこうは新鮮だ。

長い足で床を踏んで、彼が一歩ずつ受付に近づいてくる。

「すみません」

受付の前でぴたりと止まった彼が、低く、やや掠れた声で言う。

あ、こういう声なんだ……

「はい。なんの御用件でしょうか？」

自分が応対したかったけれど、彼の声に聞き入っていた分、反応が遅れてしまった。ふと見ると、相川は少しだけ目を輝かせ、彼と話している。

彼女も彼をカッコいいと思っているんだということがわかり、早苗はやきもきする。

そんなことを考えながら彼を見ていると、彼は一度、前髪をかきあげた。かきあげた前髪は全部上がらず、額に少しかかっている。それが妙に男の色気を感じさせた。

彼は最初に相川を見て、それから次に早苗を見て「おや」という感じに目を一瞬見開く。自分に気付いてくれたことが嬉しくて、早苗はほんのり頬を赤くする。

「君……、毎朝公園で……。ここ会社の人だったんだ」

彼は早苗を真っ直ぐに見て口を開いた。

「あ、はい。そうです」

勢い込んで答えると、コホンと相川が咳をした。

早苗は慌てて姿勢を正す。

「あ、すまない……」

早苗が注意されると気付いたらしく、彼は軽く頭を下げ、折りたたみの傘を差し出してきた。

「これ……。ランチに来てたうちの女性客の忘れ物……。ここの会社の制服を着ていたから持ってきたんだ。雨、降ってきたし、ないと帰りに困るだろう」

ぶっきらぼうな言い方だった。しかし、わざわざ届けにきてくれたのだ。想像していた通り、とても優しい人なんだろうと早苗は彼を見上げた。

視線が一瞬合う。切れ長の涼しげな目が柔らかく細められる。

早苗が注意されたことに対しての、ちょっとした詫びと挨拶のつもりなのだろう。それが嬉しくて早苗は思わず微笑む。

「ありがとうございます」

頬がどどん赤くなるのを感じながら、早苗は彼と少しでも言葉をかかわしたくてそう言った。

「ああ。昼食時はまだ降っていないから、つい忘れたんだと思う」

隣で相川が咳払いしたのに気付き、慌てて手続きの説明をする。

「ではお預かりいたします。あの、お名前のご記入をお願いいたします」

傘の持ち主に届けてくれた人の名前を伝えるため、早苗は来客名簿を差し出した。これで彼の名前がわかる。

ペンを渡すと、彼は『青山透』と力強い字で名前を書いた。

青山透……

透さんっていうんだ……

やっと彼の名前を知れた喜びに早苗の頬は緩みそうになった。

早苗はさらに期待して透が住所を書くのを待った。が、透は名前だけ書いてペンを置いてしまった。

来社名簿には住所や会社名を記入する欄もあるのに……

「あの……」

書いてもらおうと口を開きかけたが、その気配を察したように透は軽く手を振った。

「名前だけでいいかな。本当に届けにきただけだから」

そう言いながら早くも背を向けて歩き出す。

「あ、あの……」

追いかけてよとした早苗を、相川が袖を引っ張って止めた。

「忘れ物を届けにきただけだし、名前があれば充分よ」

相川は小声で早苗に言ってからノートを取り出す。日々の記録ノートだ。何時にどこから誰に宅配が届いた、など、ちよつとしたことを書き連ねる。そこに「傘の忘れ物の届けあり」と書くつもりなのだろう。

「あ、ちよつと待ってください」

受付ブースの下に来客からは見えないようにちよつとしたカウンターテーブルがある。そこでノートを広げて記入している相川の手を、早苗は思わず掴んでいた。

「何？ もうすぐ来客の増える時間帯になるから、その前に記帳して、早いところ集積所に持っていかなきゃならないのよ」

社内の忘れ物や落とし物を集めておく場所が地下にある。そこは集積所とは名ばかりのごみ捨て場のような所だ。

「あの、その……」

このまま集積所に持っていかれてしまつたら、男がわざわざ届けてくれた意味がないと早苗は思つたのだ。

それに傘には見覚えがある。総務の佐倉の物だ。

「私が届けてきます」

早苗は相川の手から傘を奪い取ると、制止も聞かず走り去った。

* * *

「まったく……。いきなり飛び出していつちやつて……」

戻つてくると、相川の機嫌が最大限に悪かつた。これから忙しい時間帯になるとわかつていたのに、相川の了承を得ずに持ち場を離れたのだ。怒られても仕方ない。

「す、すみません。でも……傘が誰のかわかつたし、佐倉さん喜んでたし……」

「村野さんの気持ちもわかるけれど……」
相川のお小言がはじまろうとした時、自動ドアが開いた。外回りの仕事から帰つてきた社員だ。

「お帰りなさい」

「お疲れ様です」

相川と揃つてそれぞれ挨拶をすると、社員が早苗に笑顔を見せた。

「君の笑顔はいいね。こつちまでなんだか笑顔になるよ」

「ありがとうございます」

嬉しくて早苗はますます笑顔になって、エレベーターに乗り込む社員を見送った。

「あー。もう……。本当に、村野さんって、笑顔だけはいいのよね」

相川がぼそりと呟いた。

「え、そうですか？ ありがとうございます」

明るく答えると、相川は大きく溜め息をつき、肩を竦めるような動作をした。あれ？

早苗はそんな相川を見て、首を傾げた。

なんだかさつきも似たような雰囲気になったけど……

あ、今のは褒められたんじゃないやなくて……

早苗は鈍感な自分が恥ずかしくって、耳まで真っ赤になった。

一日の仕事が終わり、早苗はロッカールームへ向かいながら、オレンジに塗った自分の爪を見る。

今日のラッキーカラーはオレンジだった。

占いばかり気にするのはいい加減やめなきゃ、と思っているけれど、今日の出来事を振り返り、やっぱり占い通りのラッキーカラーのマニキュアにしてよかったと思う。

頬が自然に緩んでしまうのを止められない。

このラッキーカラーを身につけたから彼に会えた気がするのだ。

相川さんには、またお小言をもらっちゃったけれど……

憧れの彼の顔をまさか会社で見られるなんて。

それに、名前がわかった。今日は、ものすごく進展した気分だ。

青山透。彼の名前を口の中で転がすようにして呟き、早苗は胸をときめかせた。

二

『今日の山羊座のラッキーカラーは白。ラッキーアイテムは文庫本。いつもと違う店で、外食をしてみるというでしょう。特に南東にあるお店が吉。きつと運命の相手と巡りあえます。仕事は手を抜かずに』

「受付、代わります」

庶務の女子社員がそう言って受付ブースにやって来た。

受付は常に二人体制だから、一人がお昼休憩に行っている間は、庶務から交代要員が来るのだ。

「よろしくお願ひします。ではお先にお昼いただきます」

早苗は相川と庶務の女子にお辞儀をして立ち上がり、受付ブースを出て制服姿のまま

外へ出る。

今日は早苗が早めに休憩をもらう番だった。朝の占いで、今日はいつもと違う場所を外食すると吉、と言っていたから社員食堂へ行くのはやめた。

しかし、いざ外に出てもなかなかいい店が見つからない。

どうしよう……。朝の占いでは、南東にあるお店がいいと言ってたけど……

会社の南東は駅とは反対方向で、食事を取れるような店などありそうにもない。一瞬早苗は躊躇した。しかし、占いを信じて、足を進める。

今朝、占いの通り白のバッグを持って通勤したら、あの公園でまた透に会え、少し会話ができた。だからやっぱり食事する場所も占いに従うことに決めたのだ。

透とは受付に傘を届けにきてくれた翌日から、お互いに会釈をするようになっていたけれど、それだけで、進展らしい進展はしていなかった。

それが今日はすれ違う時に彼の肘が早苗のバッグに触れ、言葉を交わせた。

「すみません」「こちらこそ」といった程度だが、きちんと目を見て話せた。ちっぽけなことだけど、早苗はとても嬉しかった。

そんなことを考えながら歩いていたら、透がどこかのお店で働いていることを思い出す。

この間の傘は、ランチに来た人の忘れ物って言ってたし……

ということ、彼のお店も近くにあるってわけよね？

なんで今までそれを思い出さなかったんだろう。間抜けだな私……

透の店に行きたい。そう強く願いながら、南東にあたる路地に早苗は足を踏み入れた。そこはマンションと雑居ビルしかない一方通行の道。

古びたマンションの一階にカフェ、というよりは喫茶店と呼ぶほうが似合う感じの店を見つめる。

看板には『オアシス』と書いてある。

よし。

思い切って早苗は『オアシス』に入る。

まだ昼休みには早い時間のせい、店内に人はまばらだった。二人組の若い女性と、営業帰りといった風情のサラリーマンが二、三人いる。

通りに面した窓は大きく、外の光をたっぷり取り入れている。外観から受ける印象とは違って内装は新しく、とてもおしゃれだ。

淡いグリーン系の壁に白っぽい腰板を張り巡らせた店内、テーブルも椅子も腰板と同じ素材を使っていて品が良い。各テーブルの上には小さな観葉植物があり、優しい雰囲気だ。

入って右手にあるカウンターは、女性が座りやすいようにという配慮なのか低めで、背の低い自分でも足が届きそうだ。

一人だし、カウンターでもいいかも。そう思いながら早苗は店内を見回す。と、壁に貼られたメニユーに目が止まった。

そこには『占いセット。ドリンク付き千五百円』と書かれている。占いセット？

早苗はメニユーから目が離せなくなる。視線を貼り紙に固定したまま、立ち尽くす。すると奥から出てきた店員に声をかけられた。

「いらっしやいませ。お好きな席にどうぞ」

「あ……」

やだ、私、立ったまんま、ずっと貼り紙見てた？

恥ずかしくて口ごもると、男性店員に微笑まれた。

「占いに興味ありますか？」

彼は早苗が張り紙を見ていたのに気付いていたのだろう。

「え、はい」

もちろん、と心の中で付け加える。

声をかけてくれた店員は、早苗より少し年上の男性だった。やや茶髪で、どこかのアイドルに似ている。いわゆる今時のイケメンだ。

黒い長袖のシャツに同色のカフェエプロンをつけ、早苗を見て微笑み続けている。

「でも、そろそろランチタイムなんで、占いセットは今できないんですよ」

それを聞いて少しがっかりした。

「ランチは忙しくなるから、ゆっくり占ってあげられなくて。ごめんなさい。占いは夕方からなんです。なんなら予約取りますか？」

早苗は即座にうなずいていた。

「じゃ、五時半でいいかな？ っていうか、僕の記念すべき五十番目のお客さんだ」
男性の顔が大きく綻ぶ。

「えっ！ あなたが占いを？ それにちょうど五十番だなんて……。なんかラッキーです」

驚いて口早に言うのと、目の前の彼がぶっと噴き出した。

「ちよつ……。あのさー」

何がそんなにおかしいんだろうと、早苗は目を丸くする。

「君の性格って、わかりやすいね。占わなくてもわかっちゃうし」

「え、ええっ？」

「卓巳。ランチの時間だから早く準備に戻れ」

その時カウンターの奥から声が出た。聞き覚えのある響きに、ひよっとして、と期待しながらカウンターを見る。

やっばり、透が立っていた。
トクン、と早苗の胸は高鳴る。
会いたいと、彼の店に行きたいと思っていたから自然と頬が緩む。

「あ、はい。先輩、じゃなかった、マスター」
どうやら早苗の前にいる男は卓巳という名前らしい。

「ごめんね。適当に席に座ってください。あ、それと、本当に占いを予約するのなら、カウスターにある予約ノートに名前書いておいてね」

卓巳は早苗にそう告げると、慌てて店の外へ走り出た。表にランチメニュー表を貼りに行ったようだ。

早苗はカウスター席につく。

「あの、こんにちは。このお店の方だったんですね」

早苗は目の前の彼にどきどきしながら声をかけた。

「ええ、このマスターです」

透が笑ってくれた。

「あ、そうだったんですか」

まだどきどきしながら早苗は予約ノートを開き、自分の名前を書きはじめた。
生年月日、血液型を書く。

「ランチメニューをどうぞ」

ノートを見つめていると、水とメニューが差し出された。

「ありがとうございます。えっと、今日の朝はバッグが引つかかってしまってますみませんでした。それから先日は、わざわざ傘を届けていただいてありがとうございました」

「そうかしこまらずに。座って」

いきなり立ち上がり、頭を下げながら一気にしゃべった早苗を見て透は苦笑する。

「あ……。はい」

ぺこりとお辞儀をして座りなおすと、また透に笑われた。

「えっと、あの、このAランチください」

笑われてしまったのが恥ずかしくて、すぐさま注文を決めてオーダーし、ごまかすように予約ノートの空欄に自分の名前を書いた。

「村野早苗さんか」

ノートを覗き込んできた透に言われ、早苗はこくりとうなずく。

「毎日顔を合わせていたのに、今日まで名前を知らないでいたっていうのも不思議だな」

「あ、え、本当にそうですよね」

彼に自分の名前を知ってもらえたことが嬉しくて、早苗の体温がわずかに上がった。

「そういうえば、スカートのシミは落ちましたか？」

「はい？」

何の話だろう？

「一週間くらい前かな、子犬がじゃれついて……」

「あ！」

そういえばそんなことがあった。

少し前に朝の公園で散歩中の子犬にじゃれつかれ、犬の足跡や涎よだれでスカートが汚れてしまったことがあったのだ。

「あ、はい。大丈夫でした」

早苗は上擦ふすった声で答える。身体が浮き上がりそんな気分だ。

あの時、犬が飛びかかってきたのは、透とすれ違ったあとだ。

なのに、自分のことを見てくれていた。見られていた……

恥ずかしいと思うべきなのか、見ていてくれて嬉しいと思うべきなのか少し複雑だ。

それでも気にかけてもらったと、最後には嬉しさが勝つ。

「あの、そのえつと……」

じわじわと顔が赤くなってくるのがわかって、早苗はうつむく。

「あ、いや、その……」

どこか照れたように透は視線を彷徨さまよわせたが、すぐに誤魔化すように占いの話をしは

じめた。

「あー。その、卓巳の占いはそれなりに当たる。けど、あまり占いばかり信じすぎないほうがいい」

そんな話をしていたら、卓巳がカウンターに入ってきて、口を失うらせた。

「やだなー、マスター。俺、占いはほんと、真面目にやるよ」

そう言うってから、卓巳は急に思い出し笑いをはじめた。

「そうそう、村野さんって今時珍しいくらい素直だね。まさかあんな冗談にすぐひっかかると思ってもみなかった」

早苗は訳がわからず、きよんとする。

「君を喜ばせるための冗談で五十番目って言ったら信じちゃってさ。普通、本当に五十番ですかって、聞き返しそうなもんだけど……君、信じちゃうし。聞き返してくれれば、すぐ冗談って言えたのに、言い出せなくなって俺、悩んじゃった」

早苗は真っ赤になる。

「ご、ごめんなさい」

「いや、だから……」

卓巳は大きさに肩を竦すくめる。

「おい。卓巳」

いつの間にか厨房キッチンへ行っていた透が戻ってきて、卓巳にパスタの皿を渡す。その顔は、どことなく怒っているようだ。

「はい。五番テーブルいってきまーす」

透の顔が怖かったせいかな、卓巳はそそくさといなくなった。

「悪かった」

ほそりとつぶやく透。

「あの、私、気にしていませんから、マスターさん」

「さんはいらないよ」

「はい？」

何を言われているのかわからなくて、早苗は首を傾げる。

「マスター、コーヒーおかわり」

その時、隣に座っていたサラリーマンが言い、早苗は、ようやく『マスターさん』ではなく『マスター』と呼べばいいと言われたのだと気付く。

さん付けをするのなら、青山さんと言うべきだったかもしれない。

なんか、恥ずかしい。

「あ、すみません。青山さん……」

慌てて言い直すと、ぷつと噴き出された。

「すまない。なんかそう呼べと強要したみたいで」

コーヒーを淹いれながら、透は早苗に軽く頭を下げた。

「でも、店の常連は、マスターって呼び捨てか、透と名前で呼ぶかな。村野さんにもそう呼んでもらいたい」

あ……

胸がキュンとなった。

私にも、そう呼んでもらいたいって……

「そ、それって……、あの、また来てもいいんですか？」

「もちろんだよ。常連になってくれたら嬉しい。毎日でも歓迎だ」

常連になってくれたらって、それって……

客商売だから、営業の意味合いで言ったのだろうけど、それでも早苗は嬉しくなる。

透の仕事振りを見つめながら、彼がきつと運命の相手に違いないと確信していた。

はじめてあの公園ですれ違った時からときめいていた。わざわざ傘を届けにきてくれた心遣いに、さらにときめき度が上がった。

今日は夕方にまたマスターに、いや透さんに会える。

早苗はうきうきしながら昼食を終え、午後の仕事に戻った。

* * *

終業後、ふたたび『オアシス』を訪れた早苗の前に、ロイヤルミルクティーが置かれた。「え、私これ頼んでいません。占いセットは確か、オレンジジュースかコーヒーがセットで……」

カウンターの席に座る早苗は茶器を置いた透を見た。

「いや、待たせているから……」

確かに待たされている、と早苗は背後をちらりと見る。

卓巳の占いはどうやらOL達に評判らしく、大盛況。基本は一人三十分だけれど、依頼者がその時間になっても粘ってあれこれ聞くらしく、一人十分〜二十分延長になることもざらなようだ。

今も早苗の前の予約にあたる女性が卓巳と話し込んでいる。

よく観察していると、みんなちらちらと卓巳を見ている。

どの女性も会社帰りとは思えないくらいにおしゃれだ。どうやら、彼の占いだけでなく、卓巳自身も人気があるようだ。

彼女達の服装を見て、早苗は急に自分の服がみすぼらしく感じられた。

毎朝透とすれ違うから、それなりにおしゃれには気を遣っているつもりだったけれど……

昼は会社の制服姿で会った。フライトアテンダント風のスーツだ。髪はアップにしてスカーフを巻く規則がある。

その姿だったから、おしゃれも何もなかったけれど、今はとても気になる。

アップにしていた髪をただおろして背中に流し、カチューシャをしている。

前髪はちょうど眉毛のところまで切り揃えていて、つい最近会った友達に学生みたいだと言われた。

服だってそうだ。会社では制服に着替えなければならぬため、脱ぎ着しやすい、Aラインのゆつたりとしたワンピースを着ていた。

それが余計に学生臭い、いや、今時の学生のほうがもっと大人っぽいファッションだし、おしゃれだろう。

せめてもの救いで、メイクだけは受付に相応しい感じにしているけれど……

なんか、服とか髪型とか気にするのって久々だわ。

ふと早苗はその事実に気付く。

彼氏いない歴三年だもんな。最低限のことしかしてなかった……

そんな風に思い、溜め息をもらす。

「嫌いか？ なら別な物にする」
 カウンターの中からいきなり透の手が伸びてきて、ロイヤルミルクティーの入った
 カップにかかる。

「え？ あ、いえ、好きです」

溜め息を誤解されたらしい。

「そうか。ならいい」

微笑んでくれたのだろう。透の口角が少し上がった。

「えっと、あの……」

急に気恥ずかしくなって、何かしゃべらなければ、と思った。

「ん？」

透はコーヒートを淹ひれながら早苗に視線だけ寄せす。

「そのですね、占い、こんなに人気だなんて」

「ああ。そうだな。俺もびっくりだ」

それっきり透は黙ってしまう。どうやら彼は口数が少ないタイプのようだ。

けれども決して愛想なしというわけではない。順番を待つ早苗に、飲み物をサービス
 してくれたり、さり気なく話しかけてくれたりして、優しさを感じる。

あの忘れ物の傘を届けてくれたのだから、根が優しい、いい人だからなのだとわかる。

「いつから占いセットをはじめたんですか？」

もっと透と話がしたくて早苗はそう問い掛ける。

「卓巳が来てからだ」

そこでいったん黙り、透は何故か難しい顔をした。

「三ヶ月前だ」

どうやら説明が足りないと思ったようだ。

「大学の、なんだその……、オカルトとか占いとか神秘学とか心霊研究とかそういうサー
 クルの後輩で……」

透の言葉に早苗はびっくりする。透からはオカルト好きな雰囲気は少しも漂ってこな
 いからだ。

公園で毎朝見る彼は、寡かもく黙もくなアスリートというイメージだった。実際毎朝ジョギング
 しているし。

「それから、あいつに占いの手ほどきをしたのは俺だから」

さらに意外な事実を知り、早苗は混乱する。

その時、やっと早苗の番が回ってきた。

名前を呼ばれて卓巳がいるテーブルへ行く。

すかさず透が、元々頼んであった占いセットの飲み物を持ってきてくれた。

卓巳の手にはタロットカードが握られている。普段星占いはかり気にしている早苗にはタロットが珍しく感じられた。期待に胸が膨らむ。

「さて、村野早苗ちゃんの相談は？」

にこりと卓巳に微笑まれ、早苗は妙に緊張した。

「仕事は……。職場の先輩とんだかいいつもギクシヤクして。仕事そのものも向いているかどうか気になって……」

そう告げたけれど、本当は一番占ってほしいのは透と付き合えるかどうかだ。けれども、すぐそこに本人がいるのに、そんな相談はできない。

「オケ。わかった」

少しだけ意外そうな顔をしてから、卓巳はタロットカードをシャッフルしはじめた。

早苗が自分で行なった経験のあるタロット占いは、大アルカナと呼ばれる二十二枚のカードを使うもの。今、卓巳は、それよりも多い枚数のカードを使っている。大アルカナに加え、小アルカナと呼ばれる五十六枚も使い、より細かく占える方法を採用しているのだろう。

卓巳は慣れた手つきでカードをさばき、一枚一枚めくっていく。

「これ、ウィッシュって呼ばれているスプレッドなんだけど……」

卓巳は説明しながらカードを並べはじめる。結果が出るまでは、無言で黙々とするものだと思っていた早苗は、そんな彼の姿を意外に思いながら問いかける。

「スプレッド？」

「うん。カードの展開方式。並べ方、とでもいえばいいのかな？ で、やり方は俺流なんだけど、スプレッドだけは昔からあるものだから安心して。カードは嘘をつかないし」

「あ、はい」

背筋を伸ばして答えると、微かに笑われた。

どうして私はすぐに笑われるんだろうか？ なんか、それを占ってもらったほうがよかったかも。

などと考えているうちにも、卓巳の占いは進む。

「まず、早苗ちゃん、あなたはかなり素直な性格だね。別な言い方をすれば天然？」

「え、はあ……」

「言わない？ 天然って……」

ふるふると早苗は首を横に振る。

「んー、じゃあ、馬鹿正直とかは？」

「あつ、それは……」

身に覚えがあつて、早苗はうなずく。

「うん。だろうね」

と言つて、小さく笑われた。普段あまり怒りを感じない早苗だけでも、なんだかむかむかしてきて、つい眉間に皺しわを寄せていた。

「おい。卓巳」

笑いすぎている卓巳を窘たじなめるような声がかウンターから響いた。

「もう少しわかりやすく言ったらどうだ」

「やだー、マスター怖い」

「また卓巳くんをいじめている」

常連らしい客達の間からそんな声が聞こえて、早苗は自分が悪いことをした気分になつて肩を落とす。

自分のことが原因で、透が客から悪く言われてしまった。

「みんな、占い中にそんな大声あげないでー」

卓巳が愛想をふりまきながら、周囲を見回す。

それから卓巳は、ごめんねと早苗に謝り、占いを続けた。

「早苗さんは素直で真面目すぎる性格だね。冗談も真剣に受け止めるだろう?」

「あ……。そうかも」

「ひよつとしてき、嫌味言われてても気付かなかつたりしない?」

「んんっ……。それもあるかも……」

当たつている、と早苗は目を瞠まはる。

「うん。だよ。天然さゆえか、君は少し誤解されやすいタイプかもしれないね。占い結果を見る限り、仕事との相性は悪くなさそうだし、周りに君の敵となる人物もない」

占い結果を聞き、早苗は少しほっとする。

相川とも、もつとよく話し合えば、仲良くなれるのかもしれない。

「あと君は今、仕事のことと悩んでいるようだけど、今後はそれより男性に悩まされるかね。今、早苗さんは恋してるよね? ほら、このカードが示している」

卓巳はテーブルの上に並んでいるカードの一つを指差す。それは早苗が知らない小アルカナのカードで、どんな意味なのかさっぱりわからなかった。

「え、こ、恋ですか?」

ついで上擦うわすった声を出して、早苗は真っ赤になった。

まさか相手まではばれてないよね。

と、真うしろのカウンターにいる透を意識する。

「あ、やっぱ誰か気になる人がいるんだ?」

少しからかうような口調で言われて、早苗はますます赤くなった。

「そ、それは、でもやっと名前を知った程度だし、その……」

言いながら、本当は付き合いたいと思う。しかし、今ここで言ったら、透に告白するようなものだ。

「おっけー。わかった。とにかく恋に悩まされるって未来が出ているから、当面はそっちを気にして。仕事については気になる結果は出てないし、あまり気にせずにやるといいと思う。以上なんだけど、質問はある？」

「……ないです」

透とどうなるのか知りたい、と心の中では思っていたけれど、やはり本人がいるところであんなに無理だから、早苗は一呼吸置いてから口を開いた。

「ありがとうございます」

仕事のことを聞いたはずが、いつの間にか、恋の話になっていた。早苗はなんだかわふわわした気分になる。

とりあえず出された飲み物を一気飲みして、次の女性と代わる。

恋に悩まされる、ということは今後何かしらの進展がある、ということだろう。その相手は透だったらしいな、と早苗はひそかな期待を胸に抱いて『オアシス』を出た。

三

『今日の山羊座のラッキーカラーは黒。ラッキーアイテムは薔薇。運氣アップのおまじないとして、コートをつたん裏返しにしてから着るといいでしょう。ヘアアクセサリーはつけないほうがベター。胸がときめく出来事がありそうです』

今日も一日の仕事を終えた早苗は、帰り際、会社のロッカールームでコートの袖を一回ひっくりかえした。それから元に戻して着る。

「何やってるの？」

相川に声をかけられて、早苗は振り返る。

「今日の占いで、一回裏返してから着ると運氣アップってあったから」

素直にそう答えると苦笑された。

「まーた占い？ そりゃ私だって占いは好きだけど、ほどほどにしなよね」

最近、相川と前より親しくなれた。卓巳に占ってもらったおかげで、自分から積極的に話しかける勇氣が持てるようになったからだ。

「この間も変なことしてたし……」

「なんですか？」

相川の言葉に反応して、着替え途中だった他の課の女子が、聞いてくる。

「受付カウンターの陰で、ハンカチを何度も折り畳んでいたの。お客様からは目につかない場所だったけれど、真正面を見たまま、ずっと手だけ動かしてるから、隣で見ている私はなんか怖かった……」

「あー、そういえばそうでしたね、それ一昨日でした？」

受付には、直接社員と会わなくても構わないからこれを渡しておいてくれ、という緊急を要さない訪問者もやって来る。

ちよつとしたサンプル品だったり、パンフレットの類たぐいだったりを置いていくのだ。

そういった品物を午前と午後の一問わず受付に回収に来る係がある。

彼女はそれ係だから、早苗の様子を知っているのだ。

「なんかしてるなーってわかったんですけど、あれ、ハンカチ畳んでたんだ？」

「そう。ハンカチ。何でそんなことしてるのかって聞いたら占いだって言うから、びっくりした。仕事に支障があるわけでもないんだけど……」

と、相川はちらりと早苗を見る。

「相川さん、ごめんなさい。もうやりません。その……占いは見るかもですけど……」

恥ずかしくて、声が小さくなってしまふ。

「別に占いを見るなんて言っていないわよ。なんか、かわいい趣味？ だとは思わず。ただ、お客様の前ではやらないですよ」

「はい。それはもちろん。いくら占いでも、お客様が変に思うようなことは一切しません」

「そんなの当たり前、基本中の基本」

最近、相川とはこんな風なやり取りができるようになっていた。

これも卓巳の占いを信じてアドバイス通りにした結果だ。

色々と話すうちにわかったことは、相川は大抵、早苗に腹を立てているわけではないということだ。

自分では普通にしゃべっているつもりなのに、きついと思われるかもしれない、なかなかうまくいかななくて悩んでいる、とまで言われてしまった。

「はい、お仕事頑張ります」

「あなたの笑顔、確かにいいわ」

ぺこりと頭を下げた早苗を見て、相川は微笑む。

「あ、今のは嫌味じゃないからね」

そのまま相川は片手を振ってロッカールームを出ていった。

苦笑しつつ早苗もロッカールームを出る。

会社の外に出ると、外は意外に暑かった。もう十月の末なのにコートがいらないくらいだ。それでも早苗はコートを着たまま『オアシス』へ向かった。

『オアシス』に行く時、早苗はいつもの公園を通り抜ける。

公園を抜けると遠回りになるのだが、なんとなくいつもここを通りたくなくなる。ここを通ったほうが何かいいことがあるような気がするからだ。

今日は彼と何を話そう。どんな会話ができるだろうか。

あれこれ想像しながら、遊歩道を歩いてみると、カップルが目に入った。二人は早苗が通りかかったのにも気付かず、抱き合い、キスを交わしている。

わっ！

早苗は自分のほうが恥ずかしくなって、目をそらして小走りでその場を去った。

あんなところで恥ずかしい。いやらしい。そう感じるそばから、私もあんな風に透さんに抱きしめられてキスしてもらえたら……

今日は星空も綺麗だし、なんだかロマンチックな気もするし……

と、羨ましく思う気持ちも抱いた。

* * *

「あ、早苗ちゃんいらっしやい。ちょっとお久しぶり？」

『オアシス』に入るなり、卓巳の声に迎えられた。

卓巳は今日も占いをしている。今日の客は女子高校生だ。その子の相談を聞いている途中なのに、早苗に手を振ってきた。

「卓巳さん。ちゃんと占ってあげて」

早苗は思わずそう言うてから、もう自分の定位置になっているカウンター席に腰掛ける。

あれからなんだかんだで『オアシス』に通い、最初の日に透に言われたように、早苗は常連になっていった。

何度も通ううちに、ランチタイムの間だけ厨房に調理専門のバイトが入ることや定休日が日曜なこと、土曜は午後二時まで、バイトの卓巳は基本的にランチタイムから五時までだけれど、占いの予約状況によっては閉店までいることなどを知らずになつてい。それから、透が二十九歳なのも雑談の中で判明した。

「……って言われちゃうと、なんて言い返せばいいのかわからなくて」

「それは、やりにくいですね」

「そうだろう？」

横から透と常連の会話が聞こえてくる。三十代後半くらいの男性で、ヨシさんと呼ば

れている人だ。

いつもジーンズにカジュアルなシャツを着ている彼は、音楽関係の仕事をしているらしい。

透は、一言、二言相槌あみづちのような返事をするだけで、聞き手に徹している感じだ。

「こんばんは」

早苗は二人に声をかけた。二つあけた右隣にはヨシさんが座っている。

「具合でも悪かったか？」

早苗の顔を見るなり、透が水と一緒にキャラメルティーが入ったカップを置いた。早苗の好みをもう覚えていて、こうして黙っていても出してくれるのだ。

なんか、本当に常連になっちゃったな、と早苗は少しくすぐったい気分になる。でも、具合って……？

その疑問が顔に出ているのだろう、透がすかさず口を開いた。

「いや、二、三日顔を見なかったから……」

「ああ……」

心配してもらえた嬉しさが込み上げる。

「大丈夫。元気ですよ。えっと、毎日ここに来てランチしたりお茶飲んだりしていたら、けっこうお金なくなっちゃって。給料日まで我慢していました」

実家暮らしだから、一人暮らしをしている同僚よりずっと余裕があるはずなのだが、少しは家にお金を入れているし、貯蓄もしている。けれどこの店に通うために、服を何枚か新調したから、給料日前になると意外に財布が寂しくなる。

「それは悪かった」

透は眉を寄せて、早苗の伝票を手の中で握り潰した。

「え、ええっ！」

「待ってください。そんなつもりで言ったんじゃない……」

「いや、でも今……」

そう言われて早苗は頭を抱えなくなった。

また余計なことを言ってしまった。

そういえば相川に、もつと言葉を選べ、とよく注意される。

本当のことで、そしてあなたに悪気がなくても、聞いた相手がどう思うかを考えてみなさい、とあきれられた覚えがある。

よくよく考えると、ここに通ってたらお金がなくなつた、なんて、まるでこの店が早苗からぼったくっているように聞こえるではないか。

「ごめんなさい。私その、悪い意味で言ったんじゃない……」

また不用意に言いそうになって、早苗は両手で口を塞ふさぐ。

仕事が忙しかったとか、友達と遊んでいたとか、いくらでも、しばらく顔を出さなかった理由は言えたのに。

「あ、いや。そう謝るな」

見るに見かねて助け舟を出してくれた透が苦笑する。そして手の中の伝票を丸めてカウンター下に放る。そこにごみ箱があるようだ。

「今日は特別。俺のおごりだ。それでいいか？」

「そうだ。そうだ。おごれとけ」

隣からヨシさんにまで言われてしまう。

「え、でも……」

「いや、だって今のはマスターがまどろっこしい聞き方をしたから悪いんだ」

ヨシさんは何故かにやにやしている。

「俺のどこが？」

「言葉が足りねーんだよ。口下手にも程がある。素直に『しばらく見なかったけれど、来てくれて嬉しい』とか『心配してたけど、顔を見せてくれてよかった』って言えばいいんだよ。そしたら早苗ちゃんも、今みたいな返事はしなかっただろう？」

「え、私……。その……」

なんと答えていいのかわからなかった。

それより……

来てくれて嬉しいって……

本当に透はそう思ってくれたのだろうか？

早苗はちらりと透の顔を見た。

透は照れたような顔になって、早苗と目が合うとうなずきながら言った。

「ヨシさんの言う通り。言い方がまずかった。だからおごり」

「……はい」

払いますから、とはもう言えず、早苗はうなずく。

透の照れたような顔が見られたのが、なんだか嬉しかった。

「はあ……。でも、口下手というのなら、私もです。あ、私の場合、口下手とは違うのかもかもしれないけれど……、いつつもうなんですよね」

カップに口をつけながら早苗は自嘲する。

それから店内を見渡し、占いをしている卓巳に目を留める。思えば、早苗が卓巳に占いしてもらったのは最初にこの店を訪れた日の一度だけだ。その後は予約をなかなか取れなくて、見てもらえなくなった。

最近では卓巳は、よく当たるイケメン占い師としてちょっとした有名人になって、今では一ヶ月先まで予約が埋まっているのだ。

「ここ最近の早苗は透相手に愚痴とも相談ともつかない話を、ここに来るたびにしていた。

もちろん、透ともっと親しくなりたい、彼の顔をいつも見ていたい、という気持ちが大きいのだが、透は早苗にとっていい相談相手でもあったのだ。

特に何か答えてくれるわけではない。ただ黙って早苗の話を聞いて、ごくたまにぼそりと語ってくれる。

今のように他の常連客を交えて話す時もあるけれど、透と二人で話しているほうが多かった。

他愛無い会話だけれど、早苗の心はそれで安らいだ。

透は店名通りに早苗の心のオアシスになっていた。

「私っていつも本音と建前が使い分けられなくて、失敗ばかり」

「それが村野さんのいいところだと俺は思う」

そう言ってもらえて嬉しい一方で、いつまでも「村野さん」と他人行儀に呼ばれるのが、とても寂しかった。

卓巳もヨシさんも「早苗ちゃん」って呼んでくれるのに……

それにはまず自分が「透さん」と呼んでみるのが一番なのかもしれない。そうすれば彼も、親しみやすく思ってくれるのかも。

よし。こうなったら思い切って……

「透さん」と呼びかけようとした時、ヨシさんが会話に加わってきた。

「俺もそう思うよ。あー悪い、俺が口を挟むことじゃないな」

「いえ、いいんですよ」

早苗は隣を見る。

「いや、やっぱりよくない。早苗ちゃんはマスターと話したいんだろ？ てなわけで俺はもう帰る」

「ヨシさん。まだいいじゃないですか？」

透がひきとめるが、ヨシさんは素早くコーヒー代をテーブルに置いた。

「いやいや。もう愚痴ならたっぷり聞いてもらったし。口下手だけど、愚痴を聞いてもらうにはちょうどいいよな。早苗ちゃんもたっぷり愚痴を聞いてもらうといいよ。うん」

ヨシさんはそう言い残して店を出ていった。

入れ違いに女性客が入ってくる。早苗より十五くらい年上の女性だ。

何度かこの店で顔を合わせたことのある人で、向こうも早苗に気付いたのか、すぐ隣に座ってきた。

「あー。おひさ。えっと、早苗ちゃんだったっけ？」

「はい。真由子まゆこさんこんばんは」

山崎真由子さん

山崎真由子さん……。卓巳さんに何かを占ってもらっていた時に、名前を聞いた。真由子さんですら私を早苗ちゃんって呼んでくれるのになあ。

寂しい気分ですら早苗は透を見る。が、彼はまったく早苗の気持ちになど気付いていない感じだった。

「真由子さん、どうです？」

透は真由子の前に水のグラスを置き、そう問いかけた。

あー。真由子さんも『真由子さん』って呼ばれている……

苗字で呼ばれている常連はひょっとしたら自分一人だろうか、早苗は少し悲しくなる。

「あのあと、うまくいきましたか？」

なんの話だろうか？ と早苗は少し首を傾げる。

相談事のその後……でも聞いているのだから。

二人を眺めていると、いきなり真由子がカウンターに突っ伏した。

それから大声で叫びだす。

「もう駄目っ！ あの男別れてくれないのよっ！ 卓巳くんの占い通りに他に女がいたし、証拠も見つけて突きつけたのに、離婚はしないって言うのよっ」

別れ話のトラブルだったのか、と早苗は納得した。

「ねーマスター。マスターも占いできるんでしょ？ 卓巳さんに教えたのマスターだって聞いたけど？ どうしたらあいつ別れてくれるか占ってよ」

「駄目だ。俺はプロじゃない」

そっけない返事をして、透は真由子の前にホットミルクを置いた。

あれ？ いつも真由子さんはコーヒー、それもブラックなのに。そう思っていると、真由子も頼んでないのにというふうな、不機嫌な表情で透を見た。

「今の真由子さんの気分だと、ブラックコーヒーよりこれでしょう。神経を休めたほうがいい」

「ええー。何よそれ」

口を尖らせている真由子を尻目に、透はカフェエプロンのポケットからスマホを取り出す。

マナーモードにしていたのが振動していたらしい。いつもは営業時間中にお客の前で携帯をいじる姿など見たことはなかった。けれど今は常連客しかいないし、気を許しての行動だろう。

「ん？ 何？ いや、まだまだ仕事だよ……」

電話に出た透の顔が一瞬だが、プライベートの表情になったのを早苗は見逃さなかった。

この三週間で透が店の脇にある路地裏で、今のような雰囲気話しているのを早苗は何度か見聞きした。

話し方などから相手は女性だろうな、と察しがつく。そのたびに早苗は細い針で心臓をつつかれたような痛みを感じていた。

透が独身だというのは常連客や卓巳との会話で知っていた。けれど現在恋人がいるかどうかはわからない。

彼女なのかな？

電話の相手が気になる。

そしてもし彼女からの電話なら、自分の恋はもう終わってしまふということ……

会社帰りや昼休みに、それこそ財布の中身が寂しくなるまでここに通うのは透に会いたいからだ。

顔を見て、一言二言話をするだけで、気分が浮き上がる。

新しい服を着てきても、気付いて声をかけてくれるのは卓巳だけだけれど、それでも透に会うために何を着ようか悩むのが楽しかった。

「あ、うーん。そうだな。明後日の日曜なら定休日だし……。ああ。わかった。じゃあそれで……」

透が電話を切る。

「何？ マスター、デート？ そーいや独身だもんね。デートする相手の一人や二人いでもおかしくないわよね」

カウンターに突っ伏したまま真由子が言った。

そういう話題に早苗はつい聞き耳を立ててしまう。普段なら「彼女がいるんですか」と聞いて話の輪に入っていくところだが、さすがにできない。

下手に聞いて、彼女との、のろけ話でもされたら立ち直れそうにない。

「デート？」

透が困ったような顔をして振り向いた。

「そうなんじゃないの？ だって相手、女性でしょ？」

突っ込む真由子。

「まあ、確かに女性だが……」

と、何故か難しそうな顔をして透は黙る。

なんでそんな顔をするんだろう？

会うと約束した日に他にも用事が入っているからなんだろうか。

その、他の予定も別な女性とのデートだったりして……と、早苗は嫌な想像をしてしまい、慌てて頭を振った。

「なんか羨ましいわ。デートなんてさ」